様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2016
課題番号：２３５２０４６６

研究課題名（和文）継承沖縄語と大和沖縄語――談話構造とコミュニケーション方略の国際比較研究

研究課題名（英文）Heritage Okinawan language and Japanese Okinawan: A comparative analysis of discourse structure and communication strategies

研究代表者
宮平　勝行（MIYAHIRA, Katsuyuki）

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：１０２６４４６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，沖縄語（うちなーぐち）と沖縄ことば（日本語と沖縄語の接触言語）の談話と社会言語学の研究である。談話構造の分析では，沖縄ことばの発話末形式「しようね」の固有なモダリティ用法と「さ」，「よ」，「わけ」などの相互行為助詞の会話連鎖上の位置および固有な機能を明らかにした。
　ロサンゼルスやサンパウロで継承沖縄語の調査を行い，沖縄語を通して網目状につながる「デジタル・オキナワ」という越境ネットワークと沖縄語の継承運動ついて考察した。さらに，沖縄語を用いた言語景観の分析や沖縄語がどのように商品化されているかを分析し，沖縄語をめぐる競合する言語態度や言語イデオロギーの一端を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　This study addressed some issues of discourse organization and sociocultural utilities of heritage Okinawan language and Okinawa-substrate Japanese, a contact language between Japanese and Okinawan. It discovered some unique features of an utterance-final modality marker, “shiyoo ne.” It also identified sequential positions and respective functions of interactional particles, sa, yo, and wake in Okinawan talk-in-interaction.
　Sociolinguistic analyses of Okinawan terms and expressions used in Okinawan diasporas led to a finding of a transnational network of Okinawans and Okinawans-at-heart, otherwise known as “digital Okinawa,” which has been recognized to play a significant role in promoting heritage language learning. Likewise, the analyses of linguistic landscape and commodification of Okinawan language revealed competing language attitudes and language ideologies that are now pervasive in local Okinawan communities.

研究分野：談話研究

キーワード：継承沖縄語　相互行為助詞　モダリティ　言語景観　言語イデオロギー

１．研究開始当初の背景

現代の沖縄ことばは，伝統的な沖縄語（うちなーぐち）と日本語が接触することによって生じ，段階的な変容を経て，日本語を基層言語とし，沖縄語を上層語として形成された地域共通語である。そのため，沖縄ことばには沖縄語に由来する固有な語彙や言い回しが多数見られる。それだけでなく，「さ」や「よ」といった相互行為助詞（文末詞）は固有の用法で用いられており，なかには標準日本語と同一の形式であるにも関わらず相互行為上異なる役割を果たす表現も存在する。沖縄語と日本語の言語接触の歴史をたどりながら，（日本語に完全に同化せず）現代の沖縄ことばに受け継がれた固有な談話形式が，人と人の相互行為の上でどのように用いられ，どのような社会的役割を果たしているのかという点に興味を覚えるようになった。

言語変容のプロセスを踏まえながら，沖縄語を含めた琉球諸語の継承運動についても国内外の事例をもとに考察してみようと考えた。海外で暮らす沖縄県出身の移民子弟が用いる継承沖縄語と沖縄ことばを比較することで多くの知見が得られるであろう。沖縄ことばと同様に継承沖縄語も移住先の言語（英語，スペイン語，ポルトガル語など）の影響を強く受けている。継承沖縄語の談話構造を分析することによって沖縄ことばの理解が深まるはずである。このような国際比較分析が当初からの展望としてあった。

現代沖縄ことばの談話形式は，話しことばだけでなく，書きことばにも観察できる。そのため沖縄語や沖縄ことばで書かれた街の言語景観やネット上の交信データからも談話資料を収集し分析する必要がある。書きことばも含めた幅広い談話データを取り上げることによって，沖縄ことばを対象とした社会言語学研究を深化させることが長期的な計画であった。

２．研究の目的

上記の背景のもと，５年間という長期にわたって沖縄ことばの最新の動向を把握する調査を行うことが本研究の目的である。沖縄語が日常の談話のなかでどのように表出するのか，その発話連鎖組織を明らかにし，ひいてはどのようなコミュニケーション方略を達成しているのかを解明する実証研究を目指した。こうした取り組みを通して消滅が危惧される沖縄語の維持・継承を図るための端緒を掴むことも長期的な目的である。

まず具体的な研究課題としては，(1)現代沖縄ことばではどのような形で沖縄語と日本語が混合し，どのような発話形式として表れ，どのような会話連鎖が見られるのかを明らかにすることである。沖縄ことばによるターン・テイキングの発話連鎖を取り上げ，相互行為の局所的な展開を分析することによって，談話構造の一端を明らかにする。

次の課題は，(2)誰が，どのような場面で，何を目的に沖縄語と沖縄ことばを用いているのかを記述し，その使用によって達成される対人的，社会・文化的コミュニケーション方略を検証することである。たとえば，海外移民子弟が英語やポルトガル語の談話に沖縄語を埋め込んで用いることはどのような社会的行為として受け止められるのか，音声と文字資料を併せて考察した。その上で沖縄語を共通の記号として用いることでネット上でつながっている人と人のネットワークとその対人・社会的役割について検証した。

こうしたコミュニケーション方略の分析に加えて，(3)伝統的な沖縄語や現代の沖縄ことばが日常生活においてどのような表記法で用いられているのかを記述した上で，その背後に潜む言語イデオロギーについて考察することも目的のひとつである。たとえば，沖縄の繁華街や市場において，沖縄語そのものがどのように商品化されているのかを観察し，そうした事象が沖縄語の再活性化にどのように作用するのか検証する。同様にインターネット上の仮想空間で交わされる沖縄語に関する世界各地からの個人のコメント，フェイスブックの投稿，ブログ，ニュースレターなどの文字情報が，沖縄語の次世代継承に及ぼす影響について功罪両面から検証する。総じて本研究が目指すものは，豊富にある沖縄語の研究成果を踏まえつつ，現代の沖縄ことばの談話構造をまず明らかにし，その社会・文化的な機能を社会言語学の理論的枠組みで検証することである。

３．研究の方法

本研究では多様なジャンルの談話データを用いた。まず，日常生活において自然に産出される沖縄ことばの会話を収集し会話分析を行った。自然会話データのトランスクリプトをもとに，精緻な分析を行って沖縄ことばの発話形式や会話の連鎖組織などの特徴を明らかにした。会話データは自然発話だけでなく，ラジオドラマや新喜劇を収録した録画なども用い，トランスクリプトを作成した上で分析した。会話連鎖の仕組みをとらえて参加の組織や終了の組織などを分析し，そこから見えてくるコミュニケーション方略について，沖縄ことば，標準日本語，そして英語の会話を比較分析することによって明らかにした。

談話データは話しことばに限定せず，会話形式で書かれた図書，新聞記事，インターネット上の投稿，フェイスブックの投稿，ブログ，ニュースレターなどの書きことばも対象とし，幅広いソースを活用した。定量的なデータと定質的なデータを組み合わせることで，沖縄ことばの全体像をできるだけ的確に捉えるようにした。

一次データの分析に加えて，国内外の調査地においては，参与観察やことばの民族誌に則った基礎データの収集と分析を行った。聞き取り調査は質的インタビュー法に基づいて行い，録音・録画の記録に基づく考察を実践した。沖縄語に関連する様々な言語事象（語彙借用，コード切換・混合，基層言語干渉，メタファー転移など）を広く取り上げ，定質的分析を行うことによって，沖縄語と沖縄ことばの社会言語学的現象を多角的にとらえるようにした。

言語景観やことばの商品化に関する調査では写真を大量に撮影し，分析の視点に沿って類型化した上で，文字と映像，そしてフィールドノートを組み合わせた分析を行った。

４．研究成果

当初の５年計画の研究を１年間延長し，計６年という長期にわたる研究活動は一定の成果を収めることができた。一連の研究は，ポルトガル語とスペイン語に造詣の深いマシー大学（ニュージーランド）の Peter R. Petrucci 教授の協力を得て共同で行った。前項の「研究の目的」欄に掲げた３つの目的に沿って研究成果をまとめる。

(1)沖縄ことばの発話形式と会話連鎖

沖縄語と日本語の接触によって生じた沖縄ことばは，現在，地方共通語として沖縄本島で広く用いられている。その発話形式のひとつの特徴が発話末尾の「さ」「よ」「わけ」などの相互行為助詞（文末詞）である。そこで，自然会話やラジオドラマの音声データをもとに，こうした相互行為助詞を含む会話連鎖の組織や会話参加の構造を分析してみた。発話者の語りを継続する運用装置という面でこれらの相互行為助詞は標準語と共通するはたらきも見られたが，語尾を引き延ばすなどの特異な音調が伴うと，聞き手を共参与者として取り立て会話ターンを共同構築するリソースとして用いることができることが分かった。この連鎖組織の運用装置は伝統的な沖縄語の用法とよく似ており，沖縄語を話せなくなった若者の間でもこうした相互行為組織の装置を継承し得ることはひとつの発見であった。

沖縄ことばの発話末尾の固有な形式である「しようね」(例:「もう帰りましょうね。」)に注目し，話者の認識や態度を示すモダリティの視点から分析を行った。標準語の「しよう（ね)」との相違を動作主が①話し手の場合，②話し手と聞き手の場合，③聞き手の場合に分けて分析した結果，標準語で意志・勧誘表現として用いられる「しよう」が，沖縄ことばでは概ね「しようね」に体系的に推移していることが分かった。沖縄ことばの「しようね」は，話者が行おうとしている行為について聞き手に念押しをしたり，既に合意が得られた行為や聞き手と共同で行う行為を促したりする機能がある。また，沖縄ことばに固有なモダリティ表現として，「しよう」は話者の要求を，「しようね」は話者の希望を表すことを資料に基づいて示した。このように時に同じ形式でありながら異なるモダリティを表現する用法は，言語接触がもたらしたひとつの産物であり，現代の沖縄言語共同体で広く用いられている具体的なコミュニケーション方略である。

(2)沖縄語と沖縄ことばによる対人的，社会・文化的コミュニケーション方略

米国ロサンゼルス在住の沖縄県移民子弟を対象に行ったフィールドワークと聞き取り調査及びフェイスブックなどの参加型プラットフォームで交わされる会話のテキストデータをもとに，海外に広がる沖縄ディアスポラにおける継承沖縄語の使用とその役割について考察した。沖縄県で５年おきに実施される「世界のウチナーンチュ大会」においても「ちむぐくる」や「ゆいまーる」といった沖縄語の語彙が沖縄移民子弟を結びつける象徴的な役割を担っていることが分かったが，海外の沖縄ディアスポラにおいても機関誌のコラムで伝統的な琉球故事や格言が紹介され，英語の文章に琉球文化を象徴する語彙が採り入れられるなど，沖縄移民子弟だけでなく沖縄に関心を持つ人々を連帯させる役割があることが分かった。さらに，フェイスブックなどのグローバルでオープンな参加型の仮想空間においても沖縄語の語彙は英語やポルトガル語のテクストの中に埋め込まれる形式で用いられており，沖縄県出身の移民子弟だけでなく，「オキナワ」という共通の関心で網目状につながる「デジタル・オキナワ」とも言えるコミュニティを形成している実態が見えてきた。こうした人と人のつながりは，もはや故郷沖縄と移住先という中央と周縁の関係ではなく，沖縄語という記号でつながった緩やかなネットワークとしてとらえるべきであり，そうすることで消滅の危機にある沖縄語に活力を与えることにもなることを論じた。

海外で使用される継承沖縄語については，ブラジル・サンパウロ市で聞き取り調査を行い Skype による追加調査を行った。その目的は，サンパウロの非営利団体による継承沖縄語の言語継承活動について調査することである。ロサンゼルス同様，沖縄語が共同体の祭りや音楽活動において欠かせないものになっており，世代を問わず沖縄語は沖縄系ブラジル人のアイデンティティの核心部分を構成するに至っている。しかしながら，ポルトガル語で書かれた沖縄語教本がないことや，沖縄語を使いこなせる教師が確保できない点が大きな課題となっている。それに加えて，沖縄語自体が消滅に瀕しているだけでなく，海外で受け継がれる沖縄語は英語圏，スペイン語圏，ポルトガル語圏など越境的な環境で用いられているため，言語継承に必要な人材や教材の確保がますます難しくなる。そ

うした困難な状況にあっても，世代の異なる学習者間で相互に教え会う活動や沖縄県との人材交流を通して沖縄を含む越境的なコミュニティを活用した言語維持と言語継承活動を提唱した。

(3)沖縄ことばを取り巻く言語イデオロギー

先述した現代沖縄ことばの記述研究やフィールドワークに基づく研究に加えて，沖縄ことばをめぐるイデオロギー論争についても調査を行った。沖縄の繁華街における言語景観の研究においては，漢字，ひらがな，カタカナ，英字などの文字の表記法及びふりがな形式を用いた異なる表記法と書体の組み合わせなどに注目し，斬新な沖縄語の表現形式が示唆する沖縄語言語景観の功罪を論じた。調査で注目した非公式の標識には漢字を沖縄語の発音で読ませるものや沖縄語の読みに沿って新しい漢字の組み合わせを提唱した斬新なものがあり，沖縄語の固有性を強調し，ひいてはその再活性化につながるような事例があった。一方で，沖縄語を単なるアクセサリーとして用いた表示や，中には沖縄語の卑語をステッカーとして販売している例もあり，沖縄語の威信を下げるような慣行も観察された。そうした功罪両面をとらえて，沖縄語言語景観の社会的意義を考察し，沖縄語の再活性化をどのように促進すべきか一定の方向性を示すことができた。

言語景観研究から浮かび上がってきた沖縄語の商品化という研究課題にも取り組んだ。沖縄語自体を商品化しステッカーやＴシャツとして販売する行為は制作者の沖縄語に対する言語態度を反映している。沖縄語を独立した言語として称揚する商品化が見られる一方で，沖縄語をひとつの地域方言として笑いのネタとして商品化することでスティグマ化するような商品も見受けられた。このように沖縄語の商品化の事例を具体的に取り上げながら，その背後にある制作者の言語態度，公正な言語観，言語イデオロギーなどについて考察した。

沖縄語は独立した言語なのか，それとも一方言なのかという論争は，参加型のソーシャルメディアを用いた沖縄語普及活動をもとにした研究活動でも取り上げた。参加者が自由に活発な意見を交わすことができるソーシャルメディアでは，普及活動を率いる沖縄語教材制作者が想定する独立言語であるとする言語観は，様々な抵抗に遭い容易に受容される訳ではないことを報告した。沖縄語の保存を目的としたオンライン学習教材がYouTube にアップロードされることによって，国内では沖縄語が方言として認識され，海外ではひとつの言語としてとらえる言語観の違いが明らかになった。こうした観察をもとに，危機言語としての沖縄語を復興するには，まず（方言ではなく）世界の危機言語のひとつとしての地位を確立することが先決であることをビデオ学習教材のマルチモーダル分析と視聴者の文字コメントの分析をもとに論じた。

こうした沖縄語をめぐる言語イデオロギーの研究課題は，数種類の言語変種を用いて上演された新喜劇における成員カテゴリー化の研究に発展した。コメディ劇団 FEC（フリー・エンジョイ・カンパニー）が演じる新喜劇「米軍基地を笑え」シリーズに登場する米軍人，中国人，日本人観光客，そして地元の沖縄県民がどのような言語変種や言語スタイルで表象されているかを考察した。継承沖縄語，大和沖縄語，標準日本語，片言の英語，そして沖縄語の俗語が言語リソースとして上述した４者の成員カテゴリーを形成する様子を会話データをもとに明らかにした。さらに，尖閣諸島を巡って先鋭化した国家間の対立の中にあって，周縁化され不可視化される地域の不満や抵抗をお笑い芸人がどのように表現するのか，言語変種とコミュニケーション方略に注目して論じた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

1. 宮平勝行・ペトゥルーチ，ピーター（印刷中）「沖縄語の商品化と言語景観」 ことばと社会：多言語社会研究，21 号 三元社 査読あり
2. Petrucci, P. R. & Miyahira, K. (2016). “Can you call it Okinawan Japanese?”: World language delineations of an endangered language on YouTube. *Journal of World Languages, 3*(3), 204-223. 査読あり http://dx.doi.org/10.1080/21698252.2017.1308305
3. 宮平勝行 (2016).「沖縄ことばのモダリティ標識『しようね』の一考察」言語文化研究紀要 *SCRIPSIMUS, 25*, 125-148. 査読なし http://hdl.handle.net/20.500.12000/36325

〔学会発表〕（計　４件）

1. Miyahira, K. & Petrucci, P. R. Laughing at US military occupation: Language play and political contestation in an Okinawan comedy series. グローバリゼーションの社会言語学（The University of Hong Kong, Pokfulam, Hong Kong, 2015 年 6 月 3 日～6 日）
2. 宮平勝行「沖縄くとぅば『～しようね』の相互行為モダリティ」国際危機言語学会（沖縄国際大学，沖縄県宜野湾市，2014 年 9 月 17～20 日）
3. Petrucci, P. R. & Miyahira, K. Framing and reframing *pirin paran kayayabira* online: The construction of Okinawan language ideologies on the participatory web. 多文化談話学会（Hangzhou, China, 2013 年 10 月 24～26 日）
4. Miyahira, K. & Petrucci, P. R. *Uchinaaguchi* in the linguistics landscape of Okinawan

community life. Symposium of the International Association for Language and Intercultural Communication. (The National University of Malaysia, Bangi, Selangor, Malaysia)（2011 年 12 月 9 日）

〔図書〕（計　4 件）

1. Petrucci, P. R. & Miyahira, K. (2015). Okinawan language (Uchinaaguchi) in the linguistic landscape of Heiwa Dōri and Makishi Market. In P. Heinrich, S. Miyara & M Shimoji (Eds.), *Handbook of the Ryukyuan Languages* (pp. 531-552). Berlin: De Gruyter.（全 723 頁）
2. Miyahira, K. & Petrucci, P. R. (2015). Uchinaaguchi as an online symbolic resource within and across the Okinawan diaspora. In P. Heinrich, S. Miyara & M Shimoji (Eds.), *Handbook of the Ryukyuan Languages* (pp. 553-571). Berlin: De Gruyter.（全 723 頁）
3. Miyahira, K. & Petrucci, P. R. (2014). Interactional particles in Okinawan talk-in-interaction. In Anderson, M. & P. Heinrich (Eds.), *Language crisis in the Ryukyus* (pp. 206-235). Cambridge: Cambridge Scholar Press.（全 334 頁）
4. Petrucci, P. R. & Miyahira, K. (2014). Language preservation in a transnational context: Community's efforts to maintain Uchinaaguchi in São Paulo. In Anderson, M. & P. Heinrich (Eds.), *Language crisis in the Ryukyus* (pp. 255-278). Cambridge: Cambridge Scholar Press.（全 334 頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
　なし

６．研究組織

(1)研究代表者
宮平　勝行　　（MIYAHIRA, Katsuyuki）
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：10264467

(2)研究分担者
　なし
研究者番号：

(3)連携研究者
　なし
　　（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
Peter R. Petrucci
マシー大学・人文社会科学部・上級講師